

第2回「買い物支援について」

私は平成26年に、40年間のサラリーマン生活（うち通算21年間単身）に終止符を打ち、故郷に帰り、「蔵ら」さんの存在を知り、青森代表の看護に立脚した考えとスタッフの皆さんのハツラツとした姿に感銘し、少しでもお手伝いをしたいということで、高齢者向けの宅配弁当を担当しました。

報酬は一杯のコーヒー、そして「いつもご苦労様です」といったねぎらいの言葉と、高齢者の方々からは、当時63歳の私に対し、「岩地のあんちゃん待ってたよ」という言葉から、私は必要とされているのだというかすかな自尊心、それと亡き母のイメージが重なり、やり甲斐を感じておりました。

弁当配達のある日、石部のバス停で信号待ちをしていたら、バスからリュックサックを背負ったご老人が降りてきて、三浦小学校の近くにある家の方へ歩き始めました。この方は町で買い物をしてきてあの長い坂道を歩いて帰るのだ、大変だな、せめて買い物支援の車があったら助かるだろうと考えたことが、買い物に不自由な地域に曜日を決めて車を運行させたいと思ったきっかけでした。私は現場を見て、その現象を推し量り、そして原理原則を打ち立てていくという「帰納法」的な発想を原点としており、このやり方は私の過去の経験からも、ほぼ間違いがないと思っております。今、役場内では、4月からの支援実現に向けて、いろいろな方法を模索、検討している最中であります。